

## 論文

## 「総合的な学習の時間」に関する教員の認識

大矢 一人<sup>1</sup>

## はじめに

本論は、「総合的な学習の時間」（以下「総合の時間」）を教員がどのように認識し、実践を行っているかをインタビューし、その内容を分析するものである。「総合の時間」は、平成10年度版の学習指導要領の目玉として登場した新しいカリキュラムの枠組みの一つである。発端は、1996年7月の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第一次答申）であり、「「生きる力」が全人的な力であるということを踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進しうるような新たな手立てを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」ことから、「一定にまとまった時間を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」が提言された。そこで、「総合の時間」が小・中学校で2002年度から完全実施され、高等学校でも学年進行で2003年度から実施された。一部には、移行措置期間に実施した学校もある。

「総合の時間」に関する教員への先行研究<sup>1)</sup>は、「総合の時間」が実施されはじめた時期から行われたが、実施から10年以上経過した現在は、管見の限り、あまり多くはない。教員1800人を対象にしたアンケート調査が行われているが、教員個人の言葉をもとにしたものはあまりない。そこで小学校教員2人、中学校教員3人、そして高等学校教員5人について、現任教員もしくは最近まで教職に就いていた者の「生の声」をまとめ、分析することとした。

インタビューは、1人を除いて30分から1時間程度の面談を行った。面談ができなかった1人は、他の人のインタビュー記録を示して、それを参考に自分自身で文章にまとめてもらった。過去および現在勤務している学校への批判や、子どもたちの現状を「生の声」として聞くために、本論で話し手が特定されないように記述した。ただし、本文もしくは注において、インタビューの日時・場所などは記した。

以下、学校種別にインタビュー内容をまとめていく。その際には、「総合の時間」の運営、内容、評価と課題といった視点で分析する。そのうえで最後に「総合の時間」全体の課題をまとめる。

---

<sup>1</sup> 藤女子大学文学部文化総合学科（教職課程）教授

## 1. 小学校における「総合の時間」の実態

### (1) インタビュー어의属性

小学校については、札幌市内の小学校の現職教員2人（A 教諭、B 教諭）にインタビューをした。2人は現在同じ学校に勤務しており、担任をもたない、いわゆる「総務」の担当である。夏季休業中に約1時間にわたって、現在の勤務校でインタビューした<sup>2)</sup>。A 教諭は過去に2校、B 教諭は3校に勤務しているので、現任校をあわせて総計6校の状況を聞くことができた。

### (2) 「総合の時間」のやり方

「総合の時間」の名称は、6校のうち2校で特別の名称があった。一つは挑戦する時間を意味する英語であり、もう一つはドラえものの「どこでもドア」をヒントにした名称である。

現任校で「総合の時間」は、1、2年次に行われる教科「生活」と連動させて年間指導計画が作成されており、原則として学年ごとに活動が組織だてで行われている。そのため「総合の時間」は、クラスで行う場合と学年全体で行う場合の二種があることになる。

運営面については、二人が現任校に赴任した時点で、ある程度の形ができていた。おそらく「言い出しっぺ」の先生がいて、その人が中心となって諸機関との調整・連絡・依頼などを行ったのであろうという。学校によって「地域とのつながり」が違いうし、地域環境自体が違いう。A 教諭は、平成26年度に行われた酪農業に関する活動を直接担当した。行政からの提案である「さっぽろっ子」という取り組みで、農業体験などを行うというものである。すべてを任せられると、やはり教員は「大変」だという。今は、学校に「総合の時間」のイベント・行事のストックがあり、それに「今年のテイストをつける」「マイナーチェンジをする」という感じであるそう。そのほうが、教員が実施しやすいというわけである。

### (3) 「総合の時間」の目的・内容

#### 1) 現在の勤務校の状況

現任校の「総合の時間」の特色は、「地域」との連携が深いということである（ただし、教諭の一人は前任校ではさらに「地域」との連携が深く、それがあある意味、しがらみとなっていたと述べていた）。平成27年度のカリキュラム内容をみると、次のようになる（学校名が特定されないように、内容を若干ぼかしている）。

- 3年…○花植え、札幌のよさを知ろう、○ふれあい交流会、ビオトープ大作戦、パソコンで調べる、雪まつりをもとに世界を知ろう
- 4年…○地域を歩こう（地域安全マップづくり）、パソコンの達人になろう、点字や手話を学ぼう、○食べ物について考えよう（田植えと稲刈り、おにぎりを食べる）、ミニミニ雪まつり
- 5年…○地域のためにできることをしよう（雪割り、清掃活動）、滝野へゴー、○ウォーキング大会、ぼくらにできること（進級に向けて）
- 6年…ハイキングパンフレットを作ろう、修学旅行へむけて、○地域とともに生きる（加齢・妊婦体験、子育てサロン）、卒業にむけて

○をつけているものが、「地域との関わり単位」であり、地域の方に直接指導していただいたり、一緒に活動するものである。それ以外に、札幌に関する調査などもあり、「地域」重視が見て取れる。

子どもたちの様子は、学年別の発達段階によって違うようである。3、4年生は、体験活動が好きで、大変興味をもって行っている。しかし、5年の後半から「ぼくらにできること」といった自分から動く必要がある内容が入ってくると、積極的な生徒がいる一方で「しょうがないから」「先生に言われたから」やる、という子もでてくるそうである。さらに6年生になると、主体的に動かなくなる子もだんだん増えてくる。

それらに対しては、モチベーションを与える指導をしているそうである。5年生の「ウォーキング大会」の事例にして述べてみよう。「ウォーキング大会」とは、地域の団体と5年生が、近くの大学構内を歩き回るという活動である。出合いの最初の段階で、教師ではなく、実際の活動の「本物」の主催者である大学生に來校してもらって活動の依頼をしてもらう。そのことで、意欲付けを図っている。また、子どもに任せる部分と教師が決めてしまう部分をはっきりと峻別して、子どもが活動しやすいようにしている。すなわち、主体的にやれるように「しくむ」方策を取っているのである。このようなイベントはゴールがあるので、それに向かっての活動がやりやすいし動機付けを行いやすい、と先生方は述べていた。

## 2) B教諭の前任校

二人の教諭の前任校の様子を見てみたい。まずB教諭は、「総合の時間」が試行段階の時期に、初任としてある小学校に赴任した。校長先生が「ぜひともやろう」と述べて、4年の学年団（2クラスで、主任は31歳、B教諭は25歳）で「〇〇川を調べよう」というテーマで活動を行った。生き物調査や、この川はどこに行くのかといったことを調べるものである。「〇〇川特捜隊」と銘うって、子どもと何度も川にいったそうである。人工の川で水質が良くないなど、今から考えると安全面での配慮意識が足りなかったと反省している。また「どんな力を身に付けさせるか」といった観点もあまり意識しなかった。しかし、とにかくがむしやらにやっていて面白かったそうである。

2つめの学校は、「総合の時間」に力を入れている学校で、すでにカリキュラムがしっかりとできていた。今度も4年生で「〇〇川〇〇隊」をつくって活動した。また、老人ホームなどを訪問したりした。それとは対照的に3つめの勤務校は、「総合の時間」にあまり力をいれていない感じがしたそうである。各教科の学習が前面にでていたという。地域とのつながりは現勤務校よりも密接で、やることが決まっていた。たとえば「〇〇公園での店だし」「6年生のミニキャンプ」などである。これらを踏まえて現任校について考えてみると、3つめの勤務校とは、内容についてはそれほどの変化は感じられなかった。ただへんな言い方であるが、現任校の方が「地域」とのしがらみは減り、逆に助けられているという感じがしている、という。

課題は、児童にとって大事な「主体的な学び」、すなわち「自分で考え、行動する」という学びをどう助けてやれるかという点であるという。教員数の問題などから、個々の子どもの要望に教員自身に対応できず、情報機器の活用などのサポートとなる。一斉指導スタイルからの脱却が課題となると思われる。また、教師の役割もいわゆる「ティーチャー」から「コーディネーター」に代わっていくのかもしれない、と述べていた。

### 3) A 教諭の前任校～児童の評価も含めて

A 教諭は、「総合の時間」施行の時期に、国際理解教育に関する研究会を開催するなど「国際理解教育」を「総合の時間」も使って行っていた学校に赴任した。A 教諭は、ビオトープを理科学的な要素よりも「外国人への発信」（国際理解）といった観点から実践した。環境の維持は、自分たちだけではなく日本そして国際的な課題であるところからはじめ、それを世界に発信しようとしたのである。その結果、子どもがビオトープへ行く回数が増え、「かもが飛んできた」「トンボの羽化がみられた」といったように、自然に興味をもつようになったという。新聞社や放送局からの取材もあったので、子どものモチベーションも高まった。

2 つめの赴任先については、この小学校の 2010 年度のカリキュラムに関する研究集録をもとに状況を把握したい。この学校「総合の時間」は「①健康・食・福祉」「②北海道・札幌・〇〇（学校名が入る…筆者注）」「③国際理解・自由研究」という 3 つのキーワード（若干の変更をあえて行っている…筆者注）をもとに「総合の時間」を構築している。時数は 3 年が 95 時間、4 年が 100 時間、5・6 年が各 70 時間で配置され、3 つのキーワードを具体化した活動が年に 5～10 程度実施されている。たとえば 4、5 年生では以下のような活動がある<sup>3)</sup>。

4 年生…私の街探検（24 時間、②）、本の世界（8 時間、③）、点字を知ろう（10 時間、②③）、いつもの生活を見なおす（20 時間、③）、私たちの心と体（7 時間、①）、地域の今昔（15 時間、②）、パソコン活用（上記 4 つの活動毎に計 10 時間）、自由研究（6 時間、③）

5 年生…食の見直し（30 時間、①）、自然とのふれあい（20 時間、②）、道の雪かきの仕組み（16 時間、②）、パソコン活用（上記 4 つの活動毎に計 5 時間 ③）、自由研究（4 時間、③）

このような活動への児童の意識は以下のものであった<sup>4)</sup>。

総合の時間がすきか

あてはまる	50 %	どちらかと言えばあてはまる	30.1 %
どちらかと言えばあてはまらない	12.9 %	あてはまらない	7 %

総合の時間は普段の生活や将来に役立つ

あてはまる	47.6 %	どちらかと言えばあてはまる	33.3 %
どちらかと言えばあてはまらない	14.3 %	あてはまらない	4.8 %

これらをみると、肯定的なものが多く、「すき」と答えた児童が全体の 8 割にのぼる。また、普段の生活や将来に役立つと答えた児童も 8 割を越えている。集録では「体験的・問題解決的な学習や P C 操作などに好感を持っている」「身近な社会事象や事前事象を取り上げて追求していること、自分のテーマに沿った追求ができることが、この時間の「有用感」につながっている」と分析している。

また、学習方法については、次のように考えている。



## 学習方法について

	とてもすき	すき	あまりすきではない	きらい
話し合うこと	29%	33%	22%	17%
納得するまで調べること	44%	31%	16%	9%
問題を発見すること	37%	38%	15%	10%
インタビューや取材をすること	27%	30%	28%	15%
パソコンを使って調べること	76%	16%	5%	3%
調べたことをまとめること	40%	34%	17%	9%

これらをみると、パソコン・WEBを使った学習が好きという児童が非常に多い反面、話し合いやインタビューなど取材といったコミュニケーションの必要な学習に対しては好きと答える割合が少ない。また問題を見だし、自ら調べて明らかにしていく活動には、意欲的な姿がみられる。集録では「学習の中で、人とかかわる力を育成し、自身をもたせていくことが求められている」、「「では、自分はどう考えるのか」「自分ならどんな行動ができるのか」と、自分の選択・判断を迫られても、「私は、こう思います」「こうやったらいい。それはね…」と述べることができる力をもっと高めていく必要がある」とまとめている。

A教諭は、この集録の年度よりも少し前に、自校の歴史を調べる学習を行った。そのときのことにについて「調べるために現地訪問をしたり、電話をかけたなど、想定していた以外のことを、担任以外の先生も含めて支援した」と述べている。

そのうえで、もう一度現任校について考えてみると、現任校は「地域」に関連することが多いのが特徴だと思うという。赴任したときは、「内容が決まっていることが多いな」と思ったそうである。「花を植える」というイベントの後に「お礼の会」、「札幌のいいもの調べ」「地域の人との懇親会」といった単発の活動が多く、「ギチギチにきまっている」という雰囲気をうけたのである。しかしそれが今は、良い方向へかわってきていると考えている。いわゆる「総務」の立場に今はいるので、実際の学年の教員はどう思っているか不明だが、教員の意志で内容・方法を変えることができる雰囲気がある、とまとめられた。

## (4)「総合の時間」の評価、今後の課題

現任校での「総合の学習」の評価は、「総合の時間」で求める4つの力（「協力する力」「みつける力」「進める力」「まとめる力」）といった観点と関連づけて行っている。学年ごとにそろえて行い、通信簿の欄に2～3の文で記す。「〇〇という活動によって、△△という力がみについた」といったスタイルである。

現任校の今後の課題について、お二人は次の三点をあげた。

第一は、「総合の時間」は学年のカリキュラムとして構成されており、それが学校全体としての構成になっていないという点である。たとえば「あらわす力」（＝発信する力）という目標を例にしてみると、6年生の最後までに、どこまでの力をつけさせるのか、その発信の方法は、WEBやインターネットか、紙媒体か、プレゼンテーションかといったことが確定されていない。そのため「〇〇だから、5年生までに〇〇までできるようにしよう」という形になっていない。6年間の縦の系統性に欠けるし、教員もそれをあまり意識していないわけである。教員が持ち上がりではなく、他の学年の様子がみえないことも関係があると思

われる。

第二に、実践された「総合の時間」の活動をまとまった形で残しておく体制が整っていない点である。過去のものを整理しつつ、最初の理念や考え、活動内容といった「基礎になるもの」を残していくことが必要であるはずだが、そうになっていないというのである。すなわち、「蓄積」として残らず、ある意味「実施すればいいや」という感じになってしまっている。

第三に、2学級という間口や教員数などで、子どもの活動の発展を阻害している状況がある。たとえばA教諭が以前勤務していた学校では、130周年のときに「130年と〇〇（学校名が入る…筆者注）」という内容の調べ学習を行った。その時には、調査をするために現地訪問をしたり電話をかけたりなど、授業で行おうと想定していたこと以外のことも、担任以外の先生などとともに支援できた。しかし、現任校では、教員数に限りがあり、子どもの主体性を制限してしまっているかもしれない、活動の広がりが乏しくなっている現状がある、というのである。

また最後にお二人は、105単位時間から70時間に減った影響は非常に大きいと述べていた。あっという間に終わるという感じで、2～3つの活動（イベント・行事）で1年が終わっているという。そして、他の業務もあり、教員間で新しい活動について検討したり、教材研究する時間があまりないと述べていた。

## 2. 中学校における「総合の時間」の実態

### （1）インタビューの属性

中学校については、札幌市内の公立中学校の現職教員1人（C教諭）、元期限付き教員1人（D元教諭）と直接面談する形でインタビューを行った。また北見市内の公立中学校の現職教員1人（E教諭）には、短時間の面談で、インタビューの意図などを説明した上で、メールによるやりとりのインタビューをした<sup>5)</sup>。これらのうちC教諭は現任校が2校目であり、総計4校の状況を聞くことができた。

### （2）「総合の時間」のやり方

「総合の時間」の名称は、3校の学校において特別な名称がなく、時間割には「総合」として略されていた。残りの1校で、挑戦をするという意味の独自の名称がつけられていた。

時間割の位置づけについては、たとえばD元教諭は1年所属であったが、道徳と「総合の時間」は、時間割上、1年全クラスで同じ時間に設定されていた。またC教諭の現任校では、月ごとに時間割が違うので、生徒の各家庭に対して月ごとの行事予定表を配布している。それには一日ごとの時間割が記されており、たとえば「総合の時間」は、〇月12日（火）と19日（火）は2・3年が6時間目に、21日（木）は1～3年が6時間目に行くことになっている。この行事予定表にはそれ以外に、「道徳」「学級活動（学活）」といった内容も記されている。

全体の運営は教務部が中心となっていく学校が多く、上記で述べたように職掌上も「総合の時間」「学活」「道徳」という3つ、もしくは「総合の時間」「道徳」という2つをあわせて分担で運営されている学校が多い。たとえばE教諭の学校では、2016年度より「総合・道徳係」が新設され、担当教員によって年間指導計画が作成された。それ以前は学年団に任

せている所が多く、決まった形がなかった、という。学年での活動も、計画が変更となる場合があるようである。C 教諭の前任校では、「総合の時間」の計画が、隔月の職員会議にあわせて小刻みにでてきていたという。「職員会議前に教務部から出てくる行事予定から、学年の担当者が「道徳」「学活」「総合の時間」の授業時数をひろい、学年会で決める。その時に、「道徳」「学活」「総合の時間」の時間を埋めていくという感じであった」と述べている。

以上のように中学校では、内容が学年で統一されており、学年ごとに行う活動と担任がクラスで行う活動の二種がある場合が多い。また、「学活」や「道徳」との連動性も高い。前任校の印象についてC教諭は、計画自体、非常に融通がきき「道徳」と「学活」が置き換わることもあった、という。また、D 元教諭の学校の年間指導計画においては、特別活動（旅行的行事・学校祭・合唱コンクール）との連関について、次のようにまとめている<sup>6)</sup>。

旅行的行事における学習場面（自主研修）は、地域の中で課題を設定し、班を単位として実践されている。自分たちが住む地域以外の街の特色を知り、自分たちで課題を設定し、それに応じて調査・まとめを作るという活動は、総合的な学習の目的と共通する点が多い。

そこで、総合的な学習の一単位としてこの旅行的行事を活用する。具体的な指導計画を立案する際には、各学年の旅行的行事のねらいや指導目標・指導の重点を見直し、「横断的・総合的な学習要素」の充実を図る。

学校祭の企画から運営までの一連の流れを通して、生徒たちが主体的に考え、判断し、創造的に取り組む姿勢を育てる活動が実践されている。よって、総合的な学習の一単位として活用しているが、総合的な学習の主旨に合うよう、より創造的・文化的で、生徒の創意工夫が生かされる工夫をしていく必要がある。

合唱コンクールの取り組みは、総合的な学習の本来のねらいと食い違う場面もあるが、本校では「仲間と協力した課題解決学習」「創造的な表現」という観点で、総合的な学習の一単位としている。学級の課題を自分たちで考え、計画し、練習することを工夫させて取り組んでいくことに留意し、取り組んでいきたい。

内容自体は、ある研究熱心な教諭の発案によって決定される場合もある。C 教諭は「「総合の時間」に関して非常に興味・関心をもっている先生がおられて、その人のアイデア・計画で成り立っている感じだった。その人が作成したワークシートをその後わずかな手直しをしつつも数年使い続けているという現状であった」と述べている。

### （３）「総合の時間」の目的・内容

#### １）その目的

「総合の時間」の目的（目標・ねらい）については、２つの学校の例を示す。

#### 例１）

目標～身近な環境におけるさまざまな体験や活動を通して、自然や人とのつながり、自分の

将来などについて主体的に考え、自ら設定した課題を追求し解決しようとする資質や能力を身につけ、社会に貢献できる生徒を育成する。

育てたい資質と能力

- (1) 自ら課題を見つけそれを解決する力を育てる。
- (2) 学習したいことを自分の問題として考えて生活しようとする力を育てる。
- (3) 自分の考えを周りに伝えるときにも他者の考えを尊重して受け入れる態度を養う。

例 2)

内容と目標～横断的・総合的な課題などについて、自然体験や社会体験、観察・実験、見学・調査などの体験的な活動、問題解決的な学習を行う。

本校でのねらい

- (1) 自ら課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。
- (2) 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探求活動に主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。
- (3) 仲間と協力しながら課題を解決・追求し、創造的に表現する態度を育てる。

これら 2 例をみると、学習指導要領の「取り扱い」や「ねらい」に沿っていることがわかる。ただし、各校の状況にあわせて改変している部分もある。前者については「自分の将来」「社会に貢献できる」といった言葉が、後者については「仲間との協力」といった言葉が、学習指導要領よりも前面に打ち出されている。

2)「総合の時間」の概要

4つの中学校に関して、内容に大きな違いはなかった。いくつかの事例を示すと以下のようになる。

例 1) 学年ごとの時数と内容

・第 1 学年 (50 時間)

- ①福祉体験学習…福祉や社会におけるさまざまな課題を見つけ、実際に職場を訪問して福祉についての理解を深める。(40 時間)
- ②進路学習…中学校卒業後の進路について具体的に考える。(5 時間)
- ③国際理解…国際理解についての知識を理解し、世界が抱える問題を知り、自分たちにできることについて考える。(5 時間)

・第 2 学年 (70 時間)

- ①職場体験学習…将来の職業について考え、実際に職場を訪問して仕事を体験する。(56 時間)
- ②自然体験学習…自然体験を通して環境保全の重要性を知る。宿泊研修時の体験 (8 時間)
- ③進路学習…中学校卒業後の進路について具体的に考える。(6 時間)

・第 3 学年 (70 時間)

- ①プロジェクト学習…自分の生き方や将来のあり方について考える。(52 時間)
- ②進路学習…卒業後の進路について具体的に考える。修学旅行時の訪問活動 (18 時間)

## 例2) 学年ごとの位置づけ

### ・実施される内容

1・2・3年…職業をテーマとした課題解決学習

3年…生き方を考える課題解決学習

### ・学年段階

第一学年（基礎的实践） 横断的・総合的な学習の基礎作りを行う。／校外学習や職場体験への取り組みを通し、体験的な学習を行う。

第二学年（応用的実践） 1年生で培った基礎を生かし、学年全体の学習テーマに沿った学習課題を個人やグループで見つけ出し、その解決に取り組む。／宿泊学習や職場体験への取り組みを通し、体験的な学習を行う。

第三学年（創造的実践） 1年生・2年生で学んだことを活用し、自らの興味・関心・個性などを生かして、自らの学習課題を設定し、学習計画を立て、創造的に課題の解決に取り組む。

### ・年間計画

#### 第一学年（51 時間）

旅行的行事への取り組み（事前6時間 事後3時間）／学校祭への取り組み（17 時間）／合唱コンクールへの取り組み（11 時間）／職業教育への取り組み（11 時間）／その他（3時間）

#### 第二学年（72 時間）

旅行的行事への取り組み（事前7 事後3）／学校祭への取り組み（18）／合唱コンクールへの取り組み（8）／職業教育への取り組み（事前8 職場体験6 事後5 上級学校調べ9）／その他（8）

#### 第三学年（74 時間）

旅行的行事への取り組み（事前5 当日4 事後2）／学校祭への取り組み（26）／合唱コンクールへの取り組み（16）／職業教育への取り組み（事前3 講演会3 事後2 自分史6 進路の学習7）

以上をみると、その中心がいわゆる「キャリア教育」となっていることがわかる。それ以外に例1)で示したような「福祉」「国際理解」、さらに例では示していないが「環境」に関係する内容（ゴミ拾いなど）がある。以下では、より具体的に、特徴的な活動をみってみる。

### 3) 訪問学習を含んだキャリア教育の例

ある中学校では、1、2年で20時間ずつ、3年で28時間を用いて、キャリア教育の一貫として「訪問学習」を行っている。時数の内容・内訳は、職業と絡めた進路学習（1年…5時間、2年…5時間、3年…14時間）、オリエンテーションと希望調査（各1時間）、班編制と組織・テーマづくり（各1時間）、事前調査・質問事項（1時間、2時間、1時間）、あいさつとマナー・注意事項（各1時間）、当日の活動（4時間、4時間、6時間）、事後反省と礼状（各1時間）、発表物製作（個人と班）（3時間、6時間、1時間）、グループ発表（1時間、2時間、1時間）、学年発表と反省（2時間、2時間、1時間）となっている。

学年ごとの訪問先は、1年が職場見学として、コカ・コーラ工場、円山動物園、自衛隊、NHKなどで毎年行き先は変更している。2年が職業体験として、理美容、マスコミ、病院、



保育園、ハイヤー会社などで、実際の職業を半日で体験する。そして3年が上級学校体験として、大学や各種学校へ、半日もしくは1日で体験しに行き、将来の進路を考える一助となるようにしている。

また別の中学校では、2年次に「職場体験学習」を行って、さまざまな職種について調べたり、レディネステストを活用して自分に合った職業を探したりして、「仕事をする事」についての理解を深める取り組みを行っている。9月に2日間にわたって、市内のお店や企業（約30箇所）を訪問して実際に体験活動を行った。業種の選定から「アポ取り」など、教員と連携しながら行い、社会的マナーを学ぶ機会ともなっている。その後、壁新聞にまとめてポスターセッションを行うことになる。

3年生では、1、2年の経験を生かし、修学旅行に組み込む形の上級学校訪問を行っている。2016年度には専門学校9校と私立大学1校を訪問した。

#### 4) 福祉施設訪問を含む学習の例

1年次に、「高齢化社会を担う世代の一員として、福祉についての知識と理解を深める」ために行われている40時間の学習である。オリエンテーション（1時間）のあと、まず認知症サポーター養成講座を受講し、認知症について学ぶ（3時間）。その後、訪問準備のため、班分け（1時間）や心構えの確認・計画立案・質問事項の設定などを行う（4時間）。さらに事前指導として訪問のマナーの確認と計画の再確認（2時間）を行った上で、9月に実際に訪問して体験を行う（5時間）。事後活動としては、礼状を書き（3時間）、新聞を作成する（5時間）。さらにその新聞の発表を行い（10時間）、ポスターセッションを行い（2時間）、1年間の活動のまとめ（1時間）と上級生の発表会へ参加する（3時間）。

#### （4）「総合の時間」の評価、今後の課題

「総合の時間」の評価についてD元教諭は、「通知表には、道徳と総合のコメント欄はない。所見欄と一緒にになっている」としていた。一方で、C教諭の現任校での文書には、評価に関してより詳しく記されている。これは「総合の時間」に直接関係ないものも含まれるが、興味深いので以下に記す<sup>7)</sup>。

まず学年末に記す総合の評価については「評価は数値的に表すことはせずに、所見を記入する」とある。そのうえで「課題を発見・解決する力」「自分の考えを表現する力」「人とのコミュニケーションを取る力」「自己の生き方を見つめる力」の4つの観点から、生徒のよい点、進歩の状況などを踏まえて適切に記入する。

続いて、生徒の学習や生活全般について担任から家庭に向けた所見欄（これは学期ごとに記入するもので、「総合の時間」のみに関係するものではない）の作成の心得としては、「保護者向けの表現で敬体が望ましい」「学習の評価に関する内容に偏らない」「記述はできるだけ具体的にする」「ほめることを主眼に、励ますような文章にする」とある。さらに、「～してくれました」「感謝しています」「～してください」「～しましょう」「頑張ってください」はNGワードとして掲げられている一方で、「～しました」「～しています」「～という姿が印象的でした」「期待しています」「～してほしいと思います」「～が大切です」「～が必要です」といった語尾を○としている。

続いて、今後の課題を含めて「総合の時間」に関する全体的な思いである。C教諭は、何をやればよいかを教師にまかされているが、そのアイデアがなかなかでてこない、という。

アイデアを教員みんなで出していこうという雰囲気になっておらず、だれかにまかせてそれに従うという状態になってしまっている、ともいう。同様な点について D 元教諭も、もう既存のものができあがっているのに、平の教員はそれを工夫改善してこなすという感じだ、と述べていた。また教員同士が「総合の時間」について、いろいろなことを話しているのを聞いたことはなかった、とする。さらに、E 教諭も現場の本音として、「総合の時間」の目的が教員側で明確でないからか、「なんとなく消化不良」「時数がたくさんあるのに対してうまく活用できていない」「せっきくの時間なのにもったいない」などという、葛藤があるという。しかし改善するには時間がかかるため、日々忙しく仕事に追われている教員が多いなかで推進していくのは、実際のところ困難なのである。

しかし、「総合の時間」が生徒にとって大切な時間であることは確かである。C 教諭は、生徒は社会的な体験に関心が向いていないので、「職場体験」は大切な機会だとする。E 教諭もさまざまな体験活動に対する生徒の実態について次のように述べている。

主体的な取り組みができる生徒もなかにはいるが、現在担当している3年生は受動的な生徒が多く、目的意識を持って活動できているとは言えない。将来に繋がるキャリア教育に大きく関わるものなので、より主体的・協働的な活動ができるよう、各教科とも連携し、普段の授業から積極的な態度を育成することが必要だと感じている。

まとめの学習では、ポスターセッションの形をとることが多く、今年度は下級学年を招いて発表することを計画しており、学年の交流と「見通し・振り返り」を目的としている。ポスターや壁新聞にまとめることは得意な生徒が多く、凝ったものを作成している。

しかし、やはりこのような活動を行う準備は「大変」そうである。E 教諭は、イベント・行事が多すぎるという感じだとも述べている。C 教諭も、最初の準備が「大変」であり、たとえば、職場訪問の開拓や何か新しい試みをする際のハードルが高い、という。

中学校で特徴的にみられたのは、「総合の時間」「道徳の時間」「学活」の3つがリンクされているということである。C 教諭は、「教員にとっても漠然となっている状態。一方で、「各教科」とのリンクはほとんどない」と述べていた。これらの動向は、現在変化がおきている。E 教諭は、道徳の教科化に向けて、現在過渡期であるため、今後改めてカリキュラムの見直しを図られると思われる、とする。「総合の時間」を担当しているC教諭の例をあげ、過渡期の具体的な動きを見てみる。

年度初めに教務部長から指示を受けたのは、いわゆる「総合的な学習の年間指導計画」作成のために、各学年主任から出された道徳、学活、総合の計画をもとに教務部長が作成した（一覧表）から、総合の時間をひろいあげて、「〇〇の教育」に載せるための文書（年間計画）を作成することである。

それをもとに、教務部長が「総合の時間」「道徳の時間」「学活」で何をやるのかのプラン（一覧表）として作成した。今年度から「道徳の時間」をより充実させ、授業として週に1時間を完璧に行う（単なるビデオ鑑賞に終わらせずに、副読本を使用して授業をする）こととしたので、それ以外の時間との棲み分けをはっきりさせようというものであると思われる。「道徳の時間」を週1時間設定し、それ以外の時間の内容を埋めていくという感じで、

年間計画を作成した。ただし、実際には毎週きちんと1時間を設定できない場合もあり、年35時間となるように設定していた。

今年度は、ある意味、移行期として位置づけられている。これまで、「総合の時間」「道徳の時間」「学活」の棲み分けがうまくいっていなかったが、今年は「道徳の時間」を週に1時間設定し、一応、今年度で計画した「総合の時間」を、実際の活動と見比べて、来年度に生かす年となっている。

まさに、道徳の教科化が「総合の時間」の活動に与えた影響が大きいことがわかるであろう。今年度は、この中学校での「総合の時間」「学活の時間」と「道徳の時間」の違いが、生徒にとってもはっきりとわかるという。副読本を使っているか否かで違うからである。

### 3. 高等学校における「総合の時間」の実態

#### (1) インタビュー어의属性

高等学校については、5人の現役および元教員とインタビューをした<sup>8)</sup>。そのうち二人(F元教諭、H元教諭)は道内地方の私立学校に勤務していた。G教諭は期限付きとして道内地方の公立学校に、I教諭は現在2校目の学校とともに地方の公立学校で勤務している。そしてJ教諭は現在休職中であるが、地方の公立学校に在籍している。I教諭には過去の勤務校と現在の勤務校、あわせて2校について状況を聞いたので、総計6校の状況を聞くことができた。

#### (2) 「総合の時間」のやり方

「総合の時間」の名称は、6校のうち2つの学校で特別な名称があった。そのうち、1つは総合学科の高校であり、1年次が「産業社会と人間」(70時間)、2、3年次が「総合的な学習の時間」(各70時間)として行われ、これらすべてをあわせて特別な名称で呼ばれていた。また、「総合の時間」が、「キャリア体験」といった学校設定科目を連動して行われているという例もあった。

「総合の時間」の組み立て方については、6校中5校において時間割に位置づけられており、残りの1校(公立で間口1の小規模校)では毎週、時間割が変動するので、固定ではなかった。前者でいうと、「毎週金曜日の5、6時間目(全学年)」「月曜の6時間目(3年生)」「水曜日の6時間目(全学年)」「火・木の5時間目(1年生)」「水曜日の6、7時間目(全学年)」といった形である。

担当者については、クラスごとに授業を行う場合には担任が、学年単位や学校全体で行う場合には、「総合の時間」のその内容を担当する教員が指導する形式であった。そのため、学年全体もしくは学校全体で同一時間に「総合の時間」を配置しているわけである。クラスごとに授業を行う場合、あえて隣のクラスを担当するという事例が公立高校で1つあった。間口2～3の学校で、担当している1年生は2クラスである。2組のクラス担当でありながら、「総合の時間」はあえて1組の授業を持っているという。自分の専門の授業が2年生からであるので、「顔みせ」の色合いが強いと述べていた。

「総合の時間」を立案・運営するために、独自の委員会を組織している高校が、私立学校で1つあった。その名称は「総合学習委員会」であり、教諭は次のように述べている。

総合の時間のイベントの企画・準備については、福祉事業を担当した。前任者からの引き継ぎはあったが、市の社会福祉協議会との連携などをすべて自分で行った。とくに、各関係機関との調整、地域高齢者へのプレゼントの選定などが大変であった。また管理職や福祉事業を実施する3年団の先生に対する説明なども自分が責任者として行った。全体としても非常に大変だったが、やはりこのような活動（福祉事業）は継続してあった方がよいと思っていたので、やりがいはあった。

また上記で「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」をあわせて特別な名称を持つ総合学科の高校では、3年次の内容については「キャリア教育推進部」が学年全体を担当していた。公立高校で期限付き教諭を行っている教諭は、自分が「進路指導部」に所属しており、「キャリア教育推進部」の手伝いをしているという感覚であったが、ようやく自分も「総合の時間」に関与していたことがわかってきた、と述べていた。この高校の「総合の時間」の重点目標は4つあり、2つめの「自己の在り方生き方についての考察」は生徒指導部による講話などにより、3つめの「自己の進路についての考察」は進路指導部によるガイダンスなどにより行うと同校ホームページに記されており、各部が分担して「総合の時間」を担当していることがわかる。

### （3）「総合の時間」の内容

インタビューで明らかになった6校のうち、「総合の時間」の内容は大きく二つに分けることができる。一つは、いわゆるキャリア教育を中心として自分の進路について検討・調査・活動するものであり、あわせて5校でみられ、「キャリア教育志向型」と名付ける。もう一つは、いわゆるクラブ活動的な内容を生徒が選択し活動するというものであり、私立高校1校でみられ、「クラブ活動志向型」と名付ける。前者の3つの事例と後者の事例を具体的に示す。

#### 1) キャリア教育志向型1

「キャリア教育志向型」の一つめとして、地方の総合学科の公立学校の事例をみてみよう。この学校は、1年次が「産業社会と人間」（70時間）、2、3年次が「総合的な学習の時間」（各70時間）として「総合の時間」の内容が行われている。時間割上は固定で、学年、学校全体で同じ時間をあてている。担当は、キャリア教育推進部の教員が中心で、クラスごとに実施する場合には担任が行う。

1年次は、まず宿泊研修に行く。二泊三日で近くの温泉で高校についてのガイダンスを行う。学校紹介、クラス毎のイベント（スポーツ大会）、講義などがある。続いて、上級学校訪問（9時間）を行う。事前学習（短大と大学の違いなど）をした上で、近隣の短大と大学、あわせて3校を希望者ごとに1日訪問する。訪問後は、学校ごとにまとめやお礼の手紙を書く。さらに、「インターンシップ」が24時間で行われる。行き先は、保育園・病院・スーパー・高齢者福祉施設など50箇所以上で、だいたい一つの訪問先につき3～4人ずつで行く。期間は3日間で、原則は同じ場所だが、訪問先の都合により、2日＋1日という場合もある。

S G E（構成的グループエンカウンター）やL S T（ライフスキルトレーニング）などもある。R－C A P（職業適性・学問適性等がわかるキャリア教育関係の適性検査）や、キャリア教育講座など、キャリア教育中心のものである。さらに、来年度の選択科目をどう選ぶ



かを考える「科目選択」という時間がある。担任が担当して、来年度の選択科目について話をする。

上級学校訪問やインターンシップについて教諭は、「1年のうちに、知らない進学先・進路先を知ること視野を広げることができ、意味があると思う。上級学校訪問は、当時は看護系の生徒は忙しいため行かなかったのであるが、行かせてやりたかった（2年後にはやるようになった）。また、学校近郊の地域にはあまり進学先がないので、たとえばリハビリ系や語学系などに興味がある生徒は希望に添えず、少し残念だったかもしれない」と述べている。

2年次の中心は、見学旅行（探求活動）（22 時間）である。自分の進路にあわせた行き先や体験内容を決定する。2014 年度は、10 月に大阪・京都・奈良・東京への4泊5日の見学旅行を行った。探求活動というのは、旅行の最中に福祉系の生徒が、たとえば海遊館・ディズニーランドなど、行った先でのバリアフリーの状況を調べるといった内容である。事前に調査内容を考えたり、事後に発表するための準備、発表会自体が、探求活動として扱われる。また食に興味がある生徒が多いグループは、京都の郷土料理などを食して、まとめを行うなどをする。発表が個人個人なので、班のメンバーのテーマに合わせた自主研修を計画するように心がけている。

進路については、見学旅行明けから、受験に向けての準備を開始する。おおまかに大学・短大・専門学校・看護もしくは就職などといった、進路先を考える。面接指導などがはじまり、1月末の先輩と語る会では大学・短大・専門学校・看護、公務員、就職ごとにグループを作って（30～40人）、先輩の話を聞いて、ディスカッションを行う。

また、3年の「卒業研究」に向けて、テーマの検討・決定をする。たとえば、今年度、本学の食物栄養学科に入学した生徒は、進路にあわせて「生活習慣病にならないために」というテーマを決めていた。2年生になって、より自分の進路について、深く考えることが可能になる。先輩の話を聞いて、今のうちからできることをしておこうという気持ちが高まる。しかし公務員志望の子であると、それに合致した、探求活動の際のテーマが見つからないときがあったり、直接進路に関わらない自分の興味関心になった場合もある。そこが難しいところである。

1、2年次には、大学の教員を招いての出前授業も実施しており、その頻度は1年に2回程度である。いくつかの学校を同一時間に招いて、希望のところに学生は参加する。

3年生は、進路学習と卒業研究が同時平行で行われる。「総合の時間」の2時間続きを二つに分けるというスタイルである。卒業研究は、パソコンを使って、クラスごとに個人別の学習をする。進路学習は、進路先にふりわけて、グループごとに活動する。大学グループは英語や数学などの演習をするし、専門学校グループは、AO入試などが早いので、日程確認、面接練習、志望理由の考察などを行う。校内進路説明会は、本校のためだけに、各大学・専門学校の先生が説明会を行う。これら3年生の活動について教諭は「進路が決まるまでは学習をがんばる子が多いが、早く決定した子のモチベーションを維持するのが大変である」と述べている。また、「全学年一緒に、単発で講演会（交通安全セミナーやスマートフォン・インターネットの使い方、薬物乱用など）も行われる」と補足し、全体としては、「40人というクラス規模で、進路がさまざまな生徒がいるので、指導するのが大変なときもある」と述べた。

この学校では「総合の時間」と直接リンクしていないが、LHRは学年統一で週に一度あ



る。これは学校行事（進路を除く、体育祭・学校祭などの準備が中心）がメインとなっている。見学旅行のためにLHRを使うが、班決めなどをやる時間であり、「総合の時間」と一応区別しているという。

以上の事例は、いわゆる進路指導的な内容と、高校の学習内容の総仕上げ的な内容である「卒業研究」を融合したキャリア教育的な「総合の時間」である。

## 2) キャリア教育志向型2

続いて、間口1という小規模な地方の公立高校の事例である。キャリア志向型といっても1年次には地域連携の体験活動で自分を見つめ、その後インターンシップや「自立」のための活動を行うというものである。繰り返しとなるが、「総合の時間」は学年ごとに2単位で、間口が1つなるので、全校で実施する以外は担任が指導する。

1年生は、地域の基幹産業である農業についての体験学習が中心で、田植え、草刈りなどの手入れ、収穫といった農作業を学校外および学校菜園で行う。最初は「土にはさわれない」と言っていた生徒が、収穫の時には率先して泥の中に入ることもある。学校生活や集団の活動に慣れてきた成果かもしれないとのことである。

自ら育てた収穫物を用いて調理および食品加工も行う。食品加工体験は制限時間もあり、生徒も「時間までに終わらせないといけないから、いそいでやる」という感じである。普段、人間関係が希薄な生徒同士でもみんなで一緒にやっている。周囲の状況をみて活動できる子や指示待ちの子、一緒に作業をしてはじめてできる子などさまざまである。生徒は「楽しい作業、楽しくない作業の双方をやった」「初体験でした」や「むずかしくてつまらなかった」（特別なニーズを必要とする生徒）という感想をもったという。教諭は「うまくいってもいなくても、成功自体（おいしいものができるなど）が目標ではない。作業を体験することに意味がある」と考えていたそうである。以上の例は、恵まれた地域資源（人材、環境）を有効に活用し、地域との連携を踏まえた学習活動と言えるであろう。

2年生の中心的な活動はインターンシップで、3日間を2回実施する。事前学習として、マナー指導、自己紹介文作成、実習先との打ち合わせ指導などが行われ、地域の各事業所での実習が実際に行われる。事後には、礼状作成、体験発表会、まとめのレポート作成が行われる。教諭は「電話や打ち合わせ、日誌、振り返りなど、やることが多く、さらに外部と関わるのが苦手な生徒達にとっては大きな壁である。生徒に希望をとり、受け入れが可能な場合、希望先に体験しに行くのであるが、受け入れ先の理解もあり、順調に過ごす生徒が多い。しかし、挨拶の声が小さい、自分から質問ができないなど、社会性に関してインターンシップ先からコメントいただくときもある。」と述べている。

3年生は「自立」についてのテーマ学習である。たとえば、会社と起業について、物流とサービスについてといった内容について、調べ学習をする。具体的には、教諭の担当した年度には、卒業生へのインタビューを行い、高卒者の収入・支出などを調査した。自分が高卒で就職したらどう使うかを考えたり、もし札幌などで専門学校に通った場合、一人暮らしの準備金や準備をどうするか、といったシミュレーションすることを考える内容も行った。社会的責任を負う立場として、その意識を持たせるためである。

1年から3年全体で、冬に一般市民にも開放する形で、地域のホールにおいて「総学発表会」を行う。老人大学も兼ねているので聴衆は150人程度である。「総合の時間」でやったことをパワーポイントを使って、一人5分程度で発表する。全員発表が原則で、とにかく全

員がしゃべる。人前でしゃべる経験をもつことが大事である。パワーポイントを作成し、原稿を作らせるが、パソコンが得意な生徒には凝ったデザインをすすめ、苦手な生徒には写真に一言をつけるとよいといった指導を行う。生徒の力量の差がはっきりとわかってしまう場合もあるが、生徒自身による発表を意識しているので、全員を平均的なものにしようとはしていないと言う。3年生になると、発表準備も発表も慣れていき、グループ準備にしてもスムーズにいく場合が多い。

教諭は、「総合の時間」の意義について、次のように述べている。

「総合の時間」は本校にとって、とても大事である。なぜなら、集団生活に慣れていない子や不登校気味の子もいるので、社会性を身につけるのに大切だからである。まず地域に根ざした農業体験からはじまって、自分で育てたものを加工して、収穫祭でお世話になった人に食べてもらう。一連の流れに参加させることに意味がある。能力はばらばらであるが、できることをやることに意味があると思う。勉強嫌いの子にとっても、非常に意味がある。

すべての生徒にとって「社会性を身につけさせる」という点で有効だというのである。

### 3) キャリア志向型3

第三が、地方の私立高校の事例である。間口が5～6で、普通科であるが、総合選択制で6つのコース的な内容に分かれる。1年次では進学と商業という2つに分かれる。2年次になると、進学・福祉・食物健康・ビジネス・情報という5つになる（3年次にはそのまま）。クラス編成とこのコースは一致しないので毎年クラス替えがあり、一つのクラスにさまざまなコースの生徒がいることになる。よって国語や英語などはクラスで学ぶが、それ以外は特別教室で授業をうけることとなる。また、これら以外に特別進学コース（10人前後で、3年間一緒）もある。男女比は1：1程度である。

「総合の時間」を担当する常設委員会があり、その時間の名称は「総合学習」で、1～3年生すべて同一時間に行われる。講演会（交通安全セミナーやスマートフォン・インターネットについてなど）が、全学年で行われるのである。

1年次のメインは「職場体験実習」である。介護施設など20箇所以上に行って、実際の仕事をするものである。2年次には「大学見学」があり、札幌近郊の2つの大学を訪問する。2つの大学の組み合わせは学校側が決め、生徒は6グループ程度に分かれて、先生が2名ずつ引率する。そのうえで、3年次になると、進路にむけての活動が本格化する。進路に関する手引きを配布し、出願書類、志望動機書の書き方、面接練習などを実施する。それ以外には、地域福祉事業もある。以上のように内容のほとんどは進学・就職指導となっている。生徒は意外と一生懸命やっており、教諭が企画した内容（2年生対象）については、積極的に手伝いをしてくれ、3年生になってからも「是非ともやりたい」と言ってくれたという。

「総合学習」全体について、教諭は次のように述べている。

教師も生徒も、「総合学習は、進路指導もしくは作文（環境問題・情報社会・国際理解などで、進路とリンクする）を書く時間」ととらえている。ただ作文を書かせるだけではなく、事前に担任からそのテーマに関する説明をする時間があるので、生徒としても理解が深まったのではないかと思う。しかし、総合学習は進路学習だけでは無く、地域社会に目を向けた

り、自分の身近なところに対し広い視野で物事を見られるような取り組みをすることも必要だと思う。

実施については、もっと計画的にやるべきである。計画はたっているものの、ぎりぎりになって教員の経験で乗り切ろうとしている部分もあった。他の先生はベテランが多いのであせらないようだが、私はもっと早めから準備がしたかった。

総合学習は、もうやることが既定路線になっており、「前年踏襲」という雰囲気だった。5年間勤務していて多少変更はあったものの、内容の変更などはなかった。ただ、近年では、総合学習は担任の手からは離れ、専任担当教員が行うようになった模様である。

「計画的でない」「既定路線となっている」といった点に批判はあるが、ある程度の評価を与えていると思われる。

#### 4) クラブ活動志向型

以上の3つの事例がすべて内容に差があれ、キャリア教育中心であったのに対し、最後の事例はいわゆるクラブ活動的な内容である。この学校は、地方の私立学校であり、間口4となっている。「総合の時間」は特別な名称があり、曜日と時間が決まっていて、全学年で行う。

その内容はいくつかの講座に別れており、これは毎年改廃がある。講座の名称も学校名が判明しないようにぼかすが、生物の調査に関係するもの、着物に関するもの、陶芸や書道、これとは別のものづくり、野菜作り、メカに関係するもの、さらにゲーム的な活動などである。

教諭が担当した「野菜作り」では、実際には畑の開墾や雑草抜きからはじめ、にんじん・じゃがいも・ラディッシュなどをつくった。はじめは面倒に感じていた生徒も、やっていくうちに積極的になっていった。教諭としては、友達と一緒に野菜作りをするなかで、「社会性や協調性」「情報の集め方・調べ方やまとめ方」を学んでほしいと思っていた。後者については、たとえばインターネット上から料理レシピを検索する際には、失敗しないレシピを選ぶポイントを検討するといったものであり、教諭も指導していた。

全体として「総合の時間」自体は、生徒にとって楽しい時間のようなものであったという。また自分で選択したものであるので、やる気もあるように思える。しかし、問題点もあるという。それは、強化指定の部活動に参加していない生徒だけが上述の講座に入って活動しているからである。強化指定の部活動に参加している生徒は約6割おり、それらの生徒は通常の部活動をこの時間に行うわけである。また、特別進学コースの生徒は、この時間にいわゆる受験勉強を行っている。

#### (4)「総合の時間」の評価、今後の課題

高校における「総合の時間」の評価は各学校によってさまざまなようである。

クラブ活動志向型の学校では次のように行われていた。まず所見欄に関して、講座担当者が所定の用紙に記入し、講座担当者が複数の場合は代表者の分担とする。そのうえで担任が集約し、データ入力をする。所見欄の書き方指導は、学校からはなく、変な文章を書いたり、長い（所見欄におさまらない場合）ときは、担任が直して入力していた模様である。

いわゆるキャリア教育志向型でもさまざまである。たとえばある学校では、成績は通信簿

に記述せず、指導要録の記述は、原則生徒全員の同一内容であるという。主任が原案を出して、学年団で検討して決定する。発表会などで、とくにめだった活動があれば、探求活動、卒業研究の発表において「〇〇のイベントでは、クラス代表となった」といったことを追記する場合もある。

また、生徒の自己評価を使用する場合もある。学年末最後の総合学習の授業内で実施するアンケート（生徒の自己評価）や各テーマに沿って書かれた作文をもとに評価を行うのである。アンケートに書かれる生徒の感想としては「進路に向けての取り組みが進路活動の役に立った」、「作文を書く回数をこなすうちに以前より文章が書けるようになった」という内容が多かった、という。さらに通信簿への記入内容の例を掲げると、以下の通りとなる。

社会人責任講座を通して、計画性を持って行動することや社会人としてのお金と時間の使い方について考える事が出来た。

携帯・スマホ・ネットセミナーを通じて、ルールをきちんと守り、正しく携帯電話等を使用すべきであるということを学んだ。

薬物乱用防止講演会を通して、薬物は自分たちが思っているより身近に存在するものであると知り、対策について考えた。

作文学習を通して、文章を書く力が身に付いたと同時に、作文に関する資料を読み込み、現代社会の問題を知ることが出来た。

また教諭が初任のうちは、他の教諭から評価の書き方の指導を受けた、という。たとえば語尾を「理解を深めた」「視野を広げた」「作文学習を通して」「学んだ」「職業観を広げた」「学問観を高めた」とすればよいと教わったのである。

今後の課題を含めて、「総合の時間」の思いを記すと、多くの教諭が「総合の時間」の意義を認めている。たとえばクラブ活動志向型の教諭は「全体として「総合の時間」自体は、生徒にとって楽しい時間のものであった」とする。またキャリア志向型2の教諭は、社会性を身につけるために「総合の時間」はとても大事だ、とする。そのうえで自分自身について、次のようにふりかえっている。

学校の先生方は、意味があると言っていたが、一方で「毎年同じだ」という意見もある。自分にとって1年目は無我夢中で、とりあえず昨年度の内容をまね、周囲の先生方のフォローでどんどんすすめた。昨年度の例を参考にする。毎年やっていることは一緒だが、実際の生徒の様子で、内容は少しかえてみるなどの工夫をした。また全く同じ内容でも生徒によって全く違う効果がでる場合もあった。1年生を2回経験し、2回目では生徒の状況や流れを全体的に考え取り組むことができた。少し背伸びをしたくらいの量の多さをやると、やりきった達成感も生まれる。

またキャリア志向型3の教諭は、自分の高校時代を比較しつつ、生徒の状態を次のように述べている。

自分の高校時代のときはLHRと差がなく、学校行事の準備の時間に加えられていた。そ

れに比べては少しはLHRと総合の違いがはっきりしていた。LHRはまさに学級活動（学校行事の準備・練習、役員ぎめなど）を行っていた。LHRも学年団でやることが決まっている。

生徒は、意外と一生懸命やっていて、2年の福祉エリアの生徒やインターアクト部（ボランティアの部の名称）の生徒に手伝いをしてもらっていたが、一生懸命であり、自分が3年になったときにも「是非やりたい」という意欲が見られた。普通の子もほとんどまじめにプレゼント作成をしっかりとしていた。プレゼント作成終了後、学校に地域住民の代表の方と社会福祉協議会職員、校長と3年生代表生徒出席の贈呈式を行った。贈呈式は年末で、年始になるとプレゼントを贈った高齢者から生徒宛にお礼の手紙が届き、生徒はとても喜んでいた。

さらに、キャリア志向型1の教諭は、指導要領上の「総合の時間」の内容と勤務校のそれを比較して、次のように述べる。

「総合の時間」の内容として示されている「国際理解」「福祉健康」などは、本校の系列の授業では意識して行われていると思う。「生徒が興味、関心、進路等に応じて設定した課題」「自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」もある程度合致した活動をやっていると思う。「各教科などで身に付けた知識や技能の総合化」に関しては弱い感じがする。特色のある福祉系は多少関係があることをやっているが…。英語や数学に関連するものも少ないような気がする。

以上、問題点はあるつつも、ある程度の評価をしているのである。

## おわりに

以上、10人の教員（小2・中3・高校5）へのインタビューから16校（小6、中4、高6）の「総合の時間」の状況をみてきた。これを運営、内容、評価と成果、そして課題といった視点から分析すると次のようにまとめられる。

第一に、運営については、「総合」は開始から10年以上を経過したこともあり、各校ともある程度円滑に実施されているということである。開始当初は「どのような内容をやればいいのか」といった戸惑いもあり、「総合の時間」のための企画・立案・準備・実施のさまざまな場面で苦労があったと推察されるが、現在は各校での活動の実績が蓄積され、教員自身も経験を摘んだことから、年間の流れができていて、それにその年度にあわせて改変する形で授業が進められるようである。

第二に、内容については、小学校では地域と連携した内容が目立った。花植えやビオトープといった環境、雪まつりに関連づけた国際理解、雪割りや清掃活動といった地域貢献、加齢体験・妊婦体験といった福祉に通じる活動などである。

中学校・高等学校ではキャリア教育が中心となっている。多くの中学校では、1年次に地元企業を訪問・見学するなど、身近な地域と職業について考えさせる。2年次には見学だけではなくインターンシップとして実際に仕事を体験する。3年次に上級学校を訪問し、めざす進路に向かう道を考えさせるのである。こうしたキャリア教育は高等学校でも同様に実施



され、訪問先への事前・事後の指導も丁寧にされているようである。そのほか、中高を通して、行事との連関や、福祉活動、インターネットやスマートフォンの使い方や薬物乱用防止、交通安全指導も見られた。また進路とリンクさせた「卒業研究」を行う高校もあった。一方で、進路指導やキャリア教育とは全く関係のない、自分の好きな活動を行う、いわばクラブ活動的な内容を行う地方の私立高校といった例もあった。

また「総合の時間」は、とくに中学校の場合には「学級活動」、「道德の時間」とリンクされて実施されていた。たとえば修学旅行の場合、事前学習として調べ学習をする時間は「総合」の時間とし、班決めなどは学級活動の時間とするといったことが現場で行われており、学生側から見れば、どれが学級活動で「総合」なのかが不明ということになるのである。

第三に、評価については、小中高とも数値は用いず、所見欄に文章で記述する方法が採られていた。また「総合の時間」の成果については、数名の教師が、人とのかかわる力がつき、社会性が身につくことをあげていた。一方で、教師が「大変」なこととしてあげた一つに、学校外の人や組織との連絡・調整がある。時間がかかるという意味も含まれるであろうが、属しているコミュニティの外の人とかかわる「大変」さを、児童・生徒、そして教師も実感しつつ、乗り越えようとしている点が興味深かった。

第四に、今後の課題である。小学校では、まず時間数が減少したことで、2～3つの活動（イベント・行事）で1年が終わってしまうという点があげられた。また学年ごとに実施されるために、学校全体の系統性に欠けたり、学校全体の記録（蓄積）を残す体制が整っていない学校もあった。さらに学級数が少ないために2、3名の学年担当教員で企画・準備・実施しなくてはならない点もあげられた。この課題に対しては、多くの学校でおかれている「総務」的な担当が、各学年担当から記録をまとめあげて残していくことが一計かもしれない。また、学年団の引き継ぎを密に行い、「総合の時間」の文書を渡していくというやり方も意味があるかも知れない。中学校においては、上述した「総合の時間」「学級活動」「道德」のリンクと棲み分けをどのように行うかが課題となろう。「道德の教科化」の開始とあいまって、ますますこの課題が重要となる。高等学校においては、教科との関連が薄いこと、行事内容を担当できる教員がいなくなってしまうと、その活動ができなくなってしまうことなどがあげられた。

全体を通しての課題は、教材研究の時間がないという声も数多く聞かれたことである。過去の例がある場合は、毎年同じことの繰り返しになってしまっているという声もあった。今はインターネットでさまざまな地域や、目的・内容などで「総合の時間」の事例を閲覧できる。また実施を教員に丸投げするのではなく、教育委員会といった行政組織が、教員を支援することも可能であろう。たとえば、東京都にある日野市立図書館は、ホームページで「市内小中学校の先生へ」という項目を設けて支援内容を明記している<sup>9)</sup>。地域であらかじめキャリア教育に協力してくれる企業を教育委員会が募集し、そのリストを作成して学校に呈示するという手もある。

「総合の時間」は、つけさせたい力を見据えた教員が「仕掛け人」として、どれだけサポートし、ともに「楽しむ」ことができるかが、児童・生徒が生き生きと活動する大きなポイントになるであろう。

## 注

1) 「総合的な学習の時間」の先行研究のうち、教員の認識などに関するものに以下のようなものがある。

- ・手代木章宏「総合的な学習の時間 高等学校普通科における総合的な学習の時間の構想に関する一考察－「課題研究」「産業社会と人間」の実践を生かした学習活動の立ち上げに向けて－」宮城県教育研修センター『平成 13 年度 長期研修員(A) 研究報告書』1～24 頁、2002 年。

- ・大森美枝子・軸丸勇士ほか「教員 1800 人の調査からみた「総合的な学習の時間」の実施状況」『日本科学教育学会研究会研究報告』20(4)、85～90 頁、2005 年。

また、本論執筆に際しては、国立教育研究所による以下の事例集も参考にした。

『特色ある教育活動の展開のための実践事例集－「総合的な学習の時間」の学習活動の展開－(中学校・高等学校編)』2000 年、大日本図書。

『総合的な学習の時間 実践事例集(高等学校編)』2003 年、ぎょうせい。

2) 小学校に関するインタビューの属性・面接日時などは以下の通りである。

A 教諭、B 教諭 ともに札幌市立小学校正式採用教員

日時：2016 年 8 月 8 日(月) 13:00～14:00

3) 札幌市立〇〇小学校「〇〇の教育課程研究」2010 年、150～169 ページ。以下にみるように、学校に関する資料は学校名が判明しないように〇などを使用する。

4) 「学習の方法」についても含めて、同上の 134 ページに掲載されている。

5) 中学校に関するインタビューの属性・面接日時などは以下の通りである。

C 教諭 札幌市立中学校正式採用教員 日時：2016 年 7 月 28 日(木) 14:15～15:25

D 元教諭 札幌市立中学校期限付き教員 日時：2016 年 8 月 15 日(月) 10:30～11:00

E 教諭 北見市立中学校正式採用教員 日時：2016 年 8 月 23 日(火) 15:30～15:45

その後、メールにての返信を 2016 年 9 月 28 日(水) 21:30 にもらった。

6) 札幌市立△△中学校「「総合的な学習の時間」の研究推進計画」11～12 ページ。

7) 札幌市立□□中学校「平成 27 年度 □□の教育 学校推進計画」4 ページ。

8) 高等学校に関するインタビューの属性・面接日時などは以下の通りである。

F 元教諭 私立学校契約教員

日時：2016 年 7 月 21 日(木) 10:00～10:20 および 8 月 4 日(木) 12:10～12:30

G 教諭 北海道立学校期限付き教員 日時：2016 年 8 月 3 日(水) 10:15～10:35

H 元教諭 私立学校契約教員 日時：2016 年 8 月 4 日(木) 10:00～10:45

I 教諭 北海道立学校正式採用教員 日時：2016 年 8 月 4 日(木) 11:30～12:00

J 教諭 北海道立学校正式採用教員 日時：2016 年 8 月 12 日(金) 12:50～13:40

9) [https://www.lib.city.hino.lg.jp/hnolib\\_doc200801/guide/school-guide-index.htm](https://www.lib.city.hino.lg.jp/hnolib_doc200801/guide/school-guide-index.htm). 2017 年 2 月 29 日閲覧。

[謝辞] お忙しい中、インタビューに協力いただいた教員の皆様に厚く感謝いたします。本当にありがとうございました。